

鴨澤巖教授の思い出

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政地理 / JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY

(巻 / Volume)

22

(開始ページ / Start Page)

77

(終了ページ / End Page)

94

(発行年 / Year)

1994-03-24

鴨澤 巖教授 の思い出

鴨澤さんのこと

山 名 伸 作

(阪南大学経済学部教授)

1 多田先生と鴨澤さん

「私だって法政大学の総長候補になったんですよ。それを鴨澤さんがダメですというものですから」と、あるとき多田文男先生が私におっしゃったことがある。そのときはほんのちょっぴりだけ残念そうにお見うけしないでもなかったが、先生のお顔はニコニコされていたのをよくおぼえている。多田先生はことほどさように鴨澤さんを深く信頼されていたし、鴨澤さんもまた学者である多田先生がつまらぬ俗事にまきこまれないように、先生が判断を誤まらないように、必要なときには適切な進言をされていたのである。

多田先生は自然地理学が御専門であったけれども、人文地理学の分野の仕事についても評価がまことに的確であった。鴨澤さんの能力と開拓意欲を学生時代から高く買っておられた。まだ日本人学者の海外渡航の機会がほとんどなかったころに、若くして鴨澤さんがチェコでの国際学会に出席されたのは、多田先生の側面からの配慮があったのではないかと思われる。

2 学界と鴨澤さん

私が鴨澤さんにお近づき願えるようになったのは、学部を卒業してしばらく教室にいたころ、鴨澤さんが大学院に戻られてからである。当時は戦後の革新的空氣のなかで誰もが新しい地理学への途を摸索していたころである。私などは思いはあっても悶々とするばかり、一本の論文も書くことができなかった。鴨澤さんの『経済地理学ノート』は画期的記念碑である。それはまさにブレイクスルーであった。後になってこの書に対するさまざまな評価を読むとき、私には逆に評者の能力判定の秘かな楽しみとなった。

鴨澤さんは学界活動に今でも積極的である。1950年代前半、「経済地理学会」創立の中心メンバーの1人として、鴨澤さんは学会を特定の考え

方の人の集まりとならないようにされた。今となれば至極当然のことであっても、当時としては誤解さえ生みかねないやり方だったのである。

鴨澤さんはむしろ日本地理学会でも多くの役職を引き受けられたし、また評議員の連続化の廃止を実現して組織のボス化を阻止された。鴨澤さんの学界活動は地理学関係にとどまらない。学会報告で関西へ来たからと御連絡頂くときの学会名は私の全く存ぜぬ名称である。

3 「降りて降りず、降りずして降りる」

10年たち20年過ぎると、そのときがどんなに異常であっても、ほとんどのことは忘れ去られてしまう。大学紛争といえば、いまの学部学生諸君にとっては自分たちの出生以前のことである以上、われわれ老世代が述懐めいたことを口に出しても容易に共感を得られないのはやむをえない。

それにしても60年代末に、アメリカ、フランス、西ドイツ、日本などで同時多発した大学紛争は私にとっていまなおその意味が納得しえないままになっている大きな問題である。私のいた大阪市大もそうであったが法政大学も激動と混乱の日々であった。その渦中であって教職にいた人々の生き方も複雑多様であった。鴨澤さんがどのような役割を果たされたつまびらかにしないが、危急時のある期間文学部長として日夜苦闘されたのである。「降りて……」はたしか『朝日ジャーナル』に寄稿された文の題名である。その内容はおぼえていないけれども、この題名がそのときの鴨澤さんの心境と行動をまさにそのまま表現しているのである。

「私は、じつはいわゆるむら社会とのつきあい が苦手な人間である。長いものに巻かれるなど まっぴらだし、……世の中万事、是は是、非は非で通したいというのが私の本心である。」と鴨澤さんは書いておられる。引用で省略したところ

は、私の文がその省略箇所通りにみられるのを避けるためである。法政の学生諸君は引用文の出所はどの本からであるかすぐ見当がつくに違いない。そしてその本を再読すれば、「私は地理学の徒として地域づくり、とくに地域づくりの哲学に関心をもっている。」とされる鴨澤さんの地理学を改めてよく理解できる筈である。

4 鴨澤さんは新し好きである

正確な時期ははっきりしないがとにかくまだカメラがそれほど普及していなかったころ、鴨澤さんはすでに何台も高級機を持ち、交換レンズとやらもそろえておられた。あるとき川島哲郎、鴨澤巖、古賀正則の3氏がそれぞれの作品自慢をされたことがある。そのとき勝った(?)のは某企業の宣伝用に作品が1枚売れた古賀さんであったが、鴨澤さんの作品には花の写真が多かった。好んで花を撮るというところに鴨澤さんの人柄がでている。

1970年代に入るとコンピューターなるものが計量地理学と共に流行ってきた。驚いたことに石

井素介、鴨澤 巖、古賀正則の中年3人組はコンピューターに熱中し、北海道の岡本次郎さんのところまでしばしば出かけて行ったのである。

まだある。80年代になると鴨澤さんは車の運転を始められた。そしていまや自宅はパソコンで重装備されているらしい。机上のワープロがホコリをかぶりこうしてボールペンで原稿を書いている私には、実年齢で私より上である鴨澤さんが、時代の先端を走っていかれるのが何とも不思議、不可解としかいいようがない。

そういえば鴨澤さんは極秘にどこかの仙人に若がり術を伝授されているのではないかと思うほど、お会いするたびにますます若くなられているように見受けられる。青年期からずっとかなり重い持病をかかえておられるのに、この外観と行動力には驚嘆の至りである。古来稀なりの年齢になられた人とはとうてい思えない。これからはますます御壮健ですばらしい業績をあげられていかれることを心からお祈りします。

何時も刺激的な先輩

西 川 大二郎

(法政大学第一教養部教授)

鴨澤さんとの出会いは大学の学生時代に始まります。戦後の混乱期で心身共に栄養失調状態にあった私は、色々な土地を旅することができそうだと位のこと地理学科を選び、また理学部に入ったのだし、自然は裏切らないから自然地理学を勉強しようなどと考えていたのです。したがって人文地理学の面白さにとんと気づいていませんでした。

その頃の鴨澤さんは大学院生で、たまに学生の控え室に現れたような記憶があります。そして鴨澤さんが現れた後には、地理学に関わる「問題意識について」といった「残り香」が教室に漂っていたという記憶があります。その言葉についての「問題意識」さえなかった私にとって、この頃の鴨澤さんはほとんど神様のようなものでした。

3年間、私は余り勉強もせずに1952年に大学を卒業すると、生活のこともあり、またもともと学問が大好きで大学に入ったわけではないので、丁度求人であった某私立中学・高等学校に就職しました。中学・高校教員は大学教員と違って研究職でないというので、育英会の奨学資金の返還が免除されなかったのを幾分悔しく思ったことを覚えています。鴨澤さんは、翌1953年に法政大学の教員に就任されたと聞きました。1952年は、5月1日に皇居前広場での「血のメーデー事件」が起こった年です。1953年、1954年には近藤康男『貧しさからの解放』三部作が公刊され、熱っぽいイデオロギーの時代でした。後で知ったことですが、鴨澤さん等の新進の地理学者が「多摩水源林調査」で、それぞれの「問題意識」で地理学的地

域調査の方法を模索していた時代でした。(柳原書店刊『地域調査』)

そのようなイデオロギーの時代の中で、私は、中学・高校の教員として社会科地理を教えなければなりません。他人に教えることほど自分の勉強になることはありません。それに他人に教えるに値するほど面白いこととは何だろうと考えるようになりました。そんな時、飯塚浩二先生を中心にして鴨澤さんを含む若手の地理学者によって新しい地理の教科書の編集が企画され、中学・高校の「現場」の教員としてそのメンバーに加わることになりました。実質的な鴨澤さんとの出会いはこの時です。この執筆者会議はただものではありませんでした。「飯塚ゼミ」といってもよいこの会では、すべてが平等だとはいっても、学力、識見からすれば、当然飯塚先生は「大先生」であり、鴨澤さんクラスは「先生」と呼ぶに相応しく、私は専ら先生方の議論を拝聴するばかりで、ヴィダルの人文地理学の生態学的生活様式論とマルクス主義的生産様式論との狭間に漂っていました。しかし、ここで育てられた「問題意識」と方法論とによって、その後、私は、法則定立が容易でないラテンアメリカ地域研究に向うようになりました。

鴨澤さんは1960年に『経済地理学ノート』(法政大学出版局)を公刊しました。この本は、当時「マルクス主義経済地誌の代表的な見本として」、また「マルクス主義地域論を研究するにあたっては、日本の文献ではやはり鴨澤の「経済地域」が重要な出発点をなすものであろう」(『経済地理学の成果と課題』大明堂、1967年)との評価を受けました。鴨澤さんは、後に思うところがあって絶版にしたというこの本を敢えて引用するのは、これがやはり時代を代表する作品ですし、私にとっても刺激的な本だからです。作品は著者の手を離れると著者の意志とは別に社会的に独り歩きするともいいます。

その中の「トルコの経済地誌」で、「地誌は地理学の方法を具体的に特定の地域に適用する際に得られるものである」(p.146)とし、「地理学は、ともあれ、地誌においてのみその有効性を発揮しう

るものであり、『一般地理学』は地誌にたどりつくために必要な一経過点に過ぎないのである」(p.147)と書かれています。問題提起は簡明なほど刺激的です。しかし、これほどはっきりと真面目に大胆にこのような内容で「地誌派」宣言をされてしまうと、当時外国のフィールドをとぼとぼと暗中模索しながら歩き始めていた私は、ちょっと待てよという気にさせられました。「地誌は地理学の方法の地域への適用」などと言われると気になります。このあとがきに齊藤一夫『トルコの農業経済』を引きあいだし、「現地語の文献を利用していない点で小論と共通の欠陥がみられる。経済的後進国の地誌を記述するための道も容易に拓けそうにない」と述べています。地域研究のためには最低の現地言語の修得は必要だと思いますが、本当に必要なのは現地言語を修得しようとする姿勢と努力であり、また現地文献を含めて文献というものの限界を認識することであろうかと思ったからです。

その後鴨澤さんは、この『経済地理学ノート』の最後の下りに忠実に、トルコ語に一層磨きをかけ、幾たびかトルコの現地調査に入り、ドイツへのトルコ人出稼ぎ労働者問題、タタール人の個別的な事例を追った作品を含めて、人間レベルの社会的行動様式を通じて、それこそ「文化」に迫る作品をものにされています。

頼まれもしないのに自ら「地誌派」を名乗り出した私としては(「地誌について」大明堂、1985年)、先生が多忙な大学の業務を離れた後にも、地誌の豊饒さのために、一層プロヴォカティブな作品をもたれることを期待しています。それというのも、この脱イデオロギーの時代となって、ヴィダル、フェーブルの人文地理学と、ピレンヌ、ブロックのアナル派社会経済史の系譜をひいたフェルナン・ブローデルの『地中海』(1949年初版)が、地理と歴史のダイナミズムとして再び脚光を浴びている状況の中で、この期に及んで、通信教育部のテキスト『地誌学通論』とやらない、何を書いて良いか分からない『地誌が苦痛論』を1～2年内に書かねばならなくなった私を、歯に衣着せぬ率直さで、同時に「江戸っ子気質」ともいう

幾分皮肉っぽい言い方で刺激して載きたいからです。

1967年に私が法政に移って来てから27年になります。この異動にあたって鴨澤さんの推挙がなかったといえは嘘になるでしょう。その時に、時代の変わり目を感じました。

以来、同じ大学で地理学を担当していたのだから

研究会で席を同じくしたのは当然としても、かつては沖縄、最近では群馬県太田、静岡県浜松などのフィールドワークに同行させてもらったのは地理学科の中で理論派といわれる鴨澤先生だけだったというのも、考えてみると意外です。最早大幅に紙数が超過しています。フィールドワーク論はまた別の機会にしたいと思います。

鴨澤先生との空間

大 崎 晃

(川村学園女子大学教授)

著作を通じてすでにお名前だけは知っていた鴨澤先生を、私がはじめて遠方からではあるがお見うけたのは、1957年の日本地理学会大会の時だった。この時今村学郎先生は、“Die Zwischens-taalen”なるテーマの発表で鴨澤先生に論争をいどまれ、私は会場の後方席から傍聴した。内容の詳細はおくとして、この時今村先生は1956年の大会発表で鴨澤先生が使用した“Arbeitsteilung”は、ドイツの友人も知らなかったがその出典はどこかと尋ねられたところ、応答に立った鴨澤先生が「あまり有名ではない“Das Kapital”なのでドイツのお友達もご存知なかったのでしょうか」と切返された時には、会場がわいた。大きな体格と自信満々の態度の今村先生とは対照的で謙虚な鴨澤先生のやりとりは、五条大橋の弁慶・牛若の故事を彷彿させ、牛若丸はこの時から気にかかる存在になったが、まだ学生だった私にとって先生は遠い存在だった。

その後若干の時を経て「新地理」という雑誌が、地理学者（徒）に対し地理学選択の動機についてアンケート調査を試みた結果を掲載したことがあった。回答者のすべてが、生徒・学生時代の授業・講義の感動を契機に地理学の面白さを手放して礼賛している中で、この不可思議な科学に懐疑的だった私は鴨澤先生の回答に心ひかれた（30年後このアンケートのことをお聞きしたが、先生は覚えていないとのことだった）。この回答はすでに公刊済みなので次に紹介させていただく。「天

井のしみを見て、あらぬ異境に空想の旅を試みる、あの少年期の心理を持ち続け、ついに地理が好きになり、中学生の頃はもう大学に行って地理を勉強する気になっていました。その頃想像した地理と、いま心ならずもたどりついた地理学とのそれぞれの姿は、なんともはやまったく別種のものであ。この時から私は「心ならずもたどりついた地理学」とはいったいどんなものかという疑問が頭から離れなくなった。しかし私にとって先生は、やはりまだ遠い存在だった。

さてその後今度はかなりの時がたち、法政大学の教員控室で非常勤講師出校の折に、毎週先生にお会いする機会に恵まれることになった。きっかけは何だったか思い出せないのだが（あるいは先生のダゴニエの書評あたりか？）、先生の地理学観についてお伺いすることにおよび、話は毎週しかもその後何カ月にもわたって続いたばかりか（当然私は聞き役専門だが）、翌週には大学でまたお会いするのに、追いかけて先生が御帰宅後すぐ書かれたお手紙まで頂戴したこともあって、ものごとに対する真摯な先生のお人柄にふれることにもなった。内容の方は、レターであってレポートではない先生の手紙を引用しても論理の前提や過程を省略しては誤解をさけられないので紹介をひかえるが、長い間私の頭にとりついてきた「たどりついた地理学」と、私の頭が調整できるまでにはなお時間がかかりそうである。

トルコの研究者として知らない人がいない鴨澤

先生と、トルコにまったく無縁な私との間に、トルコに関して一つだけ共通の話題があるといったらどうだろう。「路」「群れ」「敵」と重い作品を撮り続けたクルド出身の映画監督 Yilmaz Güney を信奉する私は、岩波ホールの「群れ」「敵」上映の情報を特ダネ（それ程でもないのだが）よろしく、先生に御注進におよんだこともあった。Güney 作品を構成するトルコの解説に恵まれたことは勿論のこと、こちらの方も先生から「群れ」とはそれぞれに思想や行動をもつ種族・村落・家族・世代を指しているのしょうという内容のお手紙をいただいた。

鴨澤先生とは帰宅の方向が同じ JR 京浜東北線

なので、夕方一緒に校門を出て飯田橋（時には何故か市ヶ谷）駅近くまで来ると、先生は時々「一寸寄りましょうか」とおっしゃることがあった。「酒旗の風」「島」「瓢箪」等々で開講された居酒屋ゼミは、さまざまなテーマと冗談の洪水の楽しい時間であった。以前から心にかかりながらもなかなかたどりつけなかった先生との間の空間が、単に物理的にではあってもやっと縮まったと感じるようになったと申しあげたら先生には御迷惑だろうか。今思えば長い時間がかかってしまったことがくやまれる。先生が大学を去られる時が近づいている。

鴨澤巖先生とエクスカッション

田 淵 洋

（法政大学経済学部教授）

私が初めて鴨澤先生にお目にかかったのは、1961年に法政大学の大学院を受験した時の面接試験でした。しかし入学後も、最初の1年間は、私が自分の興味ある自然地理学関係の科目だけを受講したこともあって、直接お話をする機会はありませんでした。鴨澤先生に個人的にお話をしていただくようになったのは、翌1962年に私が、今まで二部にあった文学部地理学科が一部に移行したのに伴って新設された、非常勤の実験助手に採用され、地理学教室のお手伝いをするようになってからだったと思います。鴨澤先生が担当される学部学生の巡検（現地研究と呼んでいた）と、その予備調査にお手伝いとしてご一諸させていただいたのが最初でした。その最初の巡検の行き先は渥美半島でしたが、その予備調査は、黒鯛の稚魚の養殖に成功された先生のご友人を水産試験場に尋ねたり、渥美半島の農業と農民の生活の様子を岩波新書に生き生きと書かれた杉浦民平さんを訪問したり、農家に学生の聞き取り調査をお願いに行きメロンのハウス栽培の様子を見せてもらったりの、私が学生時代に体験したことのない大変楽しいものでした。鴨澤先生が大変楽しそうに、そ

して生き生きと予備調査をされていた様子が今でも目に浮かんできます。このような鴨澤先生との旅行は、私にとって大変楽しいものでした。そして本番の巡検では、聞き取り調査で学生の質問が散漫にならないように時々ご自分がさりげなく質問されたり、また夜遅くまで、宿屋で昼間の調査結果のまとめ方を指導されているのを拝見したのは、大変貴重な勉強になりました。

昭和30年代から40年代にかけては、通信教育の夏のスクーリングの一部である巡検にも何度かご一緒させていただきました。この通信教育の巡検は、時には、午前から午後まで連続した講義を3日間やられ、そして3日目の夜に巡検の説明会をやり、翌日から巡検に出発するというハードスケジュールでしたが、体調が少々悪くても気にかげずにそれをきちんとこなされていたのが印象に残っています。その当時の通信教育の学生には豪傑が多く、九州から野宿をしながらバイクで上京してくる者もあり、活気に満ちていました。このハードな巡検の打ち上げにおこなわれた懇親会では、鴨澤先生は、学生達と夜遅くまで本当に楽しそうに過ごされていたのが今でも目に残っていま

す。この当時は、昼間部よりも夜間部、夜間部よりも通信教育に熱心な学生がいた時代でしたので、学生達の意気に感じられて、その当時あまりご体調がよくなかったにもかかわらず、おつき合いをされていたのかも知れません。

鴨澤先生のご交友の広さを見せていただいたのが、1980年に日本で開催された国際地理学会のエクスカージョンでした。予定されていたいくつかの巡検が、希望者が多く満席となり、急きょ実施することになった9泊10日で東京から九州まで新幹線で移動して行くエクスカージョンを鴨澤先生が引き受けられ、拓殖大学の平戸幹夫さんと一緒にそのお手伝いをした時でした。そのコースは東京から静岡、名古屋、京都、大阪、広島、福岡、伊万里までの長いものでしたが、鴨澤流の予備調査は、それぞれの地域で現地の地理学教室の方々と詳細な打ち合せをされるだけでなく、本番の時と同じ時刻の新幹線に乗り、さらに本番と同じ時刻に昼食を取るレストランに立ち寄り、その込み具合をも確かめるという詳細なものでした。本番の時の私の役目は、参加者の後ろから落ちこぼれたり、迷子になる参加者が出ないように見守ってついて行く楽な仕事でしたが、時々参加者から質問され、案内者のくせによく知らないと冷

やかされたりの楽しい仕事でした。また、夜はスケジュール変更のメモを作成して各参加者の部屋に配布したりなど忙しく、鴨澤先生はさぞかし大変であったと思います。しかし鴨澤先生は、このようなハードスケジュールの中で、昼間だけでなく、夜の飲み屋まで参加者とおつき合いをされたものでした。相手の立場で、わざわざ日本までこられたのだから相手が期待していることを少しでも実現して上げようと考えられておられたのだと思います。

私は、鴨澤先生にこのようにいろいろな巡検に連れて行っていただきましたが、それは予備調査を含めると20回以上だと思います。このお蔭で、鴨澤流の巡検に対する考え方、あるいは地理に対する考え方をお聞きし、そして学生の指導方法まで細かく見せていただく機会に恵まれました。まさに個人授業を受けたことに感謝しております。

ご退職された後には、三年ほど前に、ドイツにこられていた先生と、ヘルシンキで合流して、実施する予定で実現出来なかったフィンランド巡検が実現出来るのではないかと楽しみにしています。鴨澤先生、どうかいつまでもお元気で。

鴨澤先生お元気で

長 沢 利 明

(東京理科大学講師, 1984年度院博修了)

法政の入試を受ける時、とりよせた大学案内のパンフレットには「講義中の鴨澤教授」という写真が載っていて、この私は少なくとも高校時代から先生のお顔を存じあげてはいる。しかし実際にお会いしたのはもちろん大学院に入ってからで、学生時代に全共闘の一員として小川先生や三井先生を壇上で吊るしあげたこともあったにせよ、鴨澤先生との初めての出会いがそうしたものでなかったのは本当にさいわいなことである。

とはいえ、大学院時代の私は自堕落な生活をしており、つねに何かに怒っていて万事に余裕がな

く、未熟なくせに生意気であったから、ずいぶん先生にも反発してご迷惑をおかけした。四十にもなってまだ若気の至りでは済まされないもので、もうそんなことはやっていられないが、その他方でこの私は実は心から先生を尊敬申しあげていた。先生の書かれたものはまずほとんど目を通してきたし、それこそ赤線まみれのコピーがすり切れるほど読みふけたものだ。古本屋をまわって絶版の『経済地理学ノート』を探したり、『朝日ジャーナル』のバックナンバーの投稿欄をしらみつぶしにめくってみたこともある。それもこれも、あの

透徹した物の考え方、論理性と分析視角、そこにこめられた革新的なヴィジョンをわがものとしたかったからである。けれども、その簡潔で平易な文章とは裏腹な奥行き深さにいつも立往生してしまい、しょせん私の力量ではそれを完全に読解することなどできもせず、時にその文体を真似てエピソードを気取ってみたにせよ、足元にもおよびはしない。例の「矛盾論」や「空間消費論」などは今もって私の頭ではよく理解できずにいるのである。

思えば1977年の4月、地理学の何たるかをもわきまえずに文化の問題をやりたいなどといって指導教授になっていただいた時、「マスターならばよいがドクターでは考えさせて下さい」と先生はいわれたのであったが、何とかごまかして結局私はドクターでも面倒をみていただいた。にもかかわらず、私はアルバイトにばかりかまけてろくに勉強をしなかったで、ゼミではトンチンカンな報告をやったり、われながらつまらぬ論文の指導をお願いしたり、はては中学生にも劣る語学力をさらけ出して散々赤恥をかき、授業の進行をまたげて大変申し訳なかった。

その頃、本当に楽しかったのは沢内村や龍山村に何度か連れてっていただいたことで、元来単純な私はそこでの村づくりの実験に素朴に感動してしまい、「こうでなければ！」と心から思ったものだ。「こういう所に職を得て村づくりの一翼をになうというのもいいですね」などと私がいうと、先生は「そのためには村人たちに貢献しうる何がしかの技能を持っていないではね」とあっさりいわれ、私は赤面の至りであった。巡検の成果のゆえか、夜のコンパでははめをはずしすぎ、深夜のカラオケ騒ぎと就寝後の大イビキで先生の安眠権を奪いつつ、またしてもご迷惑をおかけしたが、先生は別段お叱りにならなかったで、ますます私は図にのぼる。私のような調子者はきびしく叱っていただいた方がよい、などと嘘ぶくわけにもいかないけれども、その後の沖縄やタタールの調査でも私は失敗を繰り返したにもかかわらず、先生はつねに大目に見て下さってやさしかっ

たし、沖縄へいく旅費がなくて先生から借金した時も一万円ずつ分割払いで一年もかけて返済することを許していただいたのである。

その沖縄の調査も今となってはたまらなく懐しいばかりである。たえようもなく美しいサンゴ礁の海、興味つきない人々の暮らしりと伝統文化。文化研究をこころざす者ならば一度はいつてみたくてもなかなかいくことのできない憧れの地で調査をおこなうチャンスを先生は私に与えて下さった。その期待にこたえるだけの成果をあげることができたか否かについては、はなはだ心もとないけれども、沖縄でのさまざまな体験は私の人生を変えるくらいに重みのあるものであった。それなのにこの私は、沖縄調査の夢がかなった喜びに舞い上がってしまい、しばしばそのはしゃぎぶりをたしなめられもした。この単純な頭脳構造は死んでも治らないかもしれないが、それでも先生はこの子供のような私を暖かく見守って下さった。

みっともないことばかり書いてしまったが、要するに私のいいたいことは、私のような不十分な人間に対してさえ示して下さった先生のその寛大さということであって、今私は心からそれを感謝するばかりであり、理論の方はついていけなかったが、少なくともそのことだけは私にも見習うことができている。だから私も後進に対してはそのようにふるまっていきたい。

53年館大学院棟も今では閉鎖されてしまい、近く取り壊されるそうで、先生との思い出の場もなくなってしまった。よくは知らないが、大学も変わり、人も変わってしまったようだ。鴨澤先生もまた大学を去られることになり、ますます思い出は過去のものとなっていく。この私もまた大学から遠ざかってしまい、およそ学問とは縁のない暮らしを今はしているわけであるが、あの時代は私の人生の中で一番輝いている。それもこれも鴨澤先生がおられたからであることにまちがいはない。出来の悪い教え子ではあったが、ここに私はあらためてお詫びと感謝を申し述べておきます。鴨澤先生、これからもどうかお元気で！

先生に見習いたいこと

長谷川 均

(国士館大学講師, 1984年度院博修了)

締め切りの過ぎてしまったこの原稿を、気にか
けながら書けないでいるせいもあるが、しばらく
会わないものだから何かにつけて先生を思い出
す。正月が近いので妻が年賀状を作ろうという。
「今年は娘の写真にしましょう」などというもの
だから先生の年賀状を思い出し、「自分でうまく
撮れたと思っても、他人が見るとつまらない写真
があるものだ」とうっかり口に出してしまう。

いっしょに酒を飲んでいた男が、どうでもいい
ようなシャレを云い、わかったかという顔をす
る。そういえば、先生もシャレを云った後は「ど
うだ」というように口もとが緩む。そんなことを
ぼんやり思い出していたら、こんどは「この夏、
久米島にいた」と意外なことを云う。「夜汽車は
あったか？、パンビィは……？」と矢継ぎ早に聞
くが、あまり酒をやらない彼は「そんな店あった
かなあ」と云うばかりだ。

夜汽車を出たあと先生は振り返って、「あーっ
悔しい。おまえに飲ませたオレがばかだった」と
いうようなことを口走った。飲みながらホステス
に聴き取りをし、酩酊した連れに録音を任せるな
どという姿勢こそが非難されねばならないのだが、
ごちそうになった挙げ句にしくじったから口
応えもできない。

戦前、南方へ移り住んだ人を捜し出してのイン
タビューだった。先生は、サイパンやテニアンで
の話を聴きたがった。しかし、子供だったこの人
に南方での記憶は無く「ハブに噛まれて足の指が
ゲンコツみたいに腫れたサァ」という、どうでも
いいような話ばかりだった。だから先生は、人に
文句でも云わないと何だか済まされない気持ちに
なったのかもしれない。夜汽車やパンビィという
のは、こんなことが縁で足しげく通ったキャバ
レーだ。

鴨澤先生と島で一緒だったのはだいぶ前のこと

で、ふた夏いっしょだった。先生は今でこそ、「そ
ろそろ帰りましょう」などと引け際がいい。とこ
ろが島では繁華街の近くに宿をとっていたし、他
所で飲んでも「バイクで帰ればいいサァ」という
土地柄だから、たいていは日付が変わるまで飲ん
でいた。調子にのって金を使いすぎ「理由は何に
しようか」などといいながら、奥さんに無心をし
ていた。もっとも『南の島から妻に手紙を出す』
ことを楽しんでいた風もあり、初老のラブレター
というような少しいい感じだった。

夜の街にあきると、山のほうにあるぼくの寄宿
先で、“雲に月”をみながら泡盛をとということも
あった。祭りの前は近くでエイサーや三線の練習
をしていた。サトウキビが風で揺れる音や、遠く
から聞こえる澄んだ三線を聞きながら庭先で飲ん
でいた。いま思うとずいぶん俗離れした日々だっ
た。飲みながらどんな話をしたのか、さっぱり覚
えていない。どうせたいした話はしていない。
こっちは生意気盛りだから、好き勝手を云って
いたに違いない。わざわざそんなヤツと話をしに、
バイクで長い坂を登って来るのだから、島では先
生もよほど閑を持て余していたのかもしれない。
あるいは、風や三線の音を楽しみに来ていたのだ
ろうか。イヤイヤ、そんな風流人とは思えない。

島では昼寝をする。夏の暑い日は、だいたい二
時間ばかり木陰でイビキをかく。気持ちよく寝て
いる日に限って、先生はバイクでやってくる。年
がいてもなく「泳ぎに行こうよ」とか、今日はこっ
ちだ、明日はどこそこへと元気がよい。ぼくは学
部生の頃、先生の講義を受けたことがある。途中
で単位は諦めたが、何だか覇気のない淡々とした
授業だった。この人は病人ではないかと思ったく
らいだ（もっともその頃は本当の病人だったそう
だ）。その人が島へ来るとずいぶん元気がいい。バ
イクでスピード出したまま、砂利道のカーブを駆

け抜ける。うしろで見ているこっちは冷汗だ。カーブの先で待っていて、満面の笑みで「うまいだろ」などという。「いちど転ばないと懲りないよなぁ」と、ぼくは思った。しかし、先生は面目を保っていた。

分野ちがいで勉強ぎらいのぼくには、先生が偉いのかどうかよくわからない。ただ、先生を偉いなあと思うのは、威張らず偉ぶらずというところで、年寄りの大学教授にはあまりないタイプだ。

だから女性ファンが多いのかもしれない。このへんは大いに見習いたい。

先生は、ぼくが生まれた年に法政に勤めたそう。夜の講義を終えた先生を、飲み屋で待っていたぼくらは、もう四十前後になった。あまり希望を持ってないまま大学院に居残っていたぼくらは、先生の貧乏自慢に笑い、元気づけられて大人になった気がする。ありがとうございました。

「優しさに感謝」

平 田 洋

(1960 年度院修修了)

定めにより鴨澤先生が退職される。月日のたつ速さが身にしみてわかる。18 歳で地理学科に入学した私は今 58 歳になった。

私のような常識に欠けた者に対しても、決して厭な顔をせずに対応してくださった。先生には感謝している。先生との思い出となれば公私にわたって数多くある。

その 1：先生が話を進める中での特徴は、本論（一番言いたいことの意）に対して、なんと理由付けの長いことである。これは、話の真意を正確に伝えたい（正しく理解させたい）との配慮があったのこらしい。とくに理解するに必要な予備知識不十分な学生に対しては、懇切丁寧な説明が伴っていた記憶がある。気軽に拝聴していた話も、いつのまにか、重みが増していることに気付いたものである。

その 2：簡単明瞭すぎて啞然としたことがある。しかし、時間がたつにつれて、当初理解していたことが、いかにも学生の域を出ていないものだと思感したことである。その内容は次の通りである。

先生はトルコに関する専門家（研究者）である。研究対象をどの国にするか否かは第三者の関与するところではない。しかし、当時としては、世界の動きからみて、ラテンアメリカ諸国やアフリカ諸国に関心をもっていた学生がいたように思えた

（「飢えの地理学」デ・カストロ著、理論社、を学んでいたためかもしれない）。授業で取り上げてほしい国があるならばトルコではないことは明白であった。（大学の先生であるからいかなる国であろうとも精通しているにちがいないと思ひこんでいた私たち学生側に誤りがあった）。

先生がアジア地誌（？）の講座を担当することになり、どの国を取り扱うかに迷ったあげくの果にトルコを選定したのである。理由は、東アジアや東南アジア諸国については、すでに資料が豊富すぎるほど存在する。すべての資料に目を通し、整理していたのでは開講に間に合わないし、二番煎じになりかねない（新鮮さが無い）。そこで、消去法により残った国がトルコになったと云うことである。即ち、当惑するほどの資料が存在しない国、それだけ取りあげられたことのない国であること（新鮮さがあることはまちがいない）。以上である。予備知識をまったく持たずとも即座に理解できた（飯田橋駅への帰途、語られた）。このような理由で研究対象を選定してよいものなのかと思うと同時に、決して口外しまい、先生のイメージダウンになりかねない、このことは私の胸の中にしまっておこうと真剣に思ったのである。ところが、30 年後の還暦祝いの席上で先生自身の口から公言してしまったのである（八王子）。私に話してきかせた時から気分は少し楽になった様に思えた

のだが、むずかしい理由付けがまったくなかったのである。私の柔軟性に欠けた大学の教授（研究者）像作りに原因があったのだと思っている。

しかし、未開拓の分野に踏み入れることは予備的（事前）資料の収集に始まる苦労が待っていることであり、そのために、「異国語」（トルコ語）を学習し始めねばならないことなどの苦労が待ち受けていることを百も承知しての選定であったことは想像できた（私の理解はこの程度。八王子の一件後であるが）。究める道には楽はなしである。

その3：いつ頃であったかは忘れたが、先生宅を訪ね、夜遅く帰途についた際、先生は駅まで送ってくださった。私が行先と運賃表を見上げていると、先生がすばやく切符を購入してくれた。恐縮と感謝の気持で一杯になったことは言うまで

ありません。御礼を述べる暇間もなく、その切符をしっかりと握り改札に入った。その際、先生が怪訝な顔をされた姿が気にはなっていた。

8年ほど前になるが、小中高の先生方と一緒に先生の案内でトルコを半周することができた。トルコ人は親日的であり、非常に親切であることを体験することができた。とくに代償を求めない親切な行為は定評通りである。機会あれば、もう一度訪ねてみたいと思っている。トルコの専門家である先生は、私たちにくらべれば、はるかにトルコ人的生活感覚を身につけているにちがいないと思っている。当方の落度である。既述の運賃の一件は、先生のトルコ人的生活感覚によるものでなく、今思い出しても恥かしい限りである。時効か。

目からおちたウロコ

原 田 えり子（旧姓 関）

（1986年度卒）

鴨澤先生、長い間お務めご苦労さまでした。この度、晴れて飯田橋刑務所よりご出所なされる？？？とお聞きし筆を執った次第です。

私が卒業したのは、ついこの間だと思っておりましたが、はや7年という歳月が過ぎようとしていたのですね。

学生時代、グータラ学生であった私には、学問のことや授業のことで鴨澤先生を語るなんてことはできそうもありませんので、灰色の脳細胞を全力で巻き戻してちょっと思い出話をしてみたいと思います。

鴨澤先生は、当時地理学科女子学生の間では「カモちゃん」の愛称で通っており、その温厚なご性格と風貌からファンも多く、東北の某巡検で“蓑”を着たお姿が「子泣きじじいにソックリ」なんてことは誰も一言も口にしませんでしたが、その写真が公開されてから益々人気でたと……聞いております。

当時、T組の女子学生の間ではケーキづくりがはやっていて、代わるがわるケーキを作ってきて

は休み時間にみんなでケーキを食べる、というなんとも平和な時期がありました。例にもれず私もケーキを作ったのですが、私の場合どういうわけかそのケーキを同じ地理学科の友人（女の子ばかり3～4人）とともに研究室に持ち込み、先生に毒味をして頂いたことがありました。半分崩れかけたイチゴのケーキを食べながら（味はおいしかったと自負しております）の雑談となり、先生がトルコに行かれた時の様子やいずれは書かねばならぬ卒業論文の話をしているうち、ついには先生のご家族のお話や奥様との出会いなど根掘り歯掘りお聞きしてしまう結果になりました。そんな質問にも鴨澤先生は、少しも照れずにお話になり、授業だけでは見られない意外な一面を見たような気がしました。

また、その時、「先生の奥様は、結婚してからもずっと仕事を続けている」ということをお聞きし、とても驚きました。というのも、それまで教師以外の職業で、それほど長く仕事を続けている女性の話を身近で聞いた事がなかったからです。

その後、確かゼミの飲み会だったと思うのですが、ちょっとすすけた居酒屋でみんながワイワイと興じているなか、静かにしていた私たちのグループの方に来てくださりいろいろお話をしてくださいました。途中、なぜかまじめな人生話となり、先生が「家庭のなかで、男性だけが外で働くということも差別だし、社会からのプレッシャーを男性を盾にしていくことだけが生き方ではないと思いますよ。女性も一緒に背負うべきだと思いますよ。」という意のことをおっしゃるのを聞いたとき、驚くのと同時に、「そういう考え方もあるんだ!」と私は目からウロコが落ちたような気がしました。

(もしかしたら、先生がおっしゃったことが前記の内容でなかったらお許しください。でも、当時の私はそういった意味にとっていました。)

卒業したら当然就職するものとは思っていましたが、それまでどういう方面に就職しようかということは考えても、社会に出て働くという意味をあまり深く考えもせずいた自分に初めて気が付き、強く反省しました。あれは、本当に意味深い瞬間でした。

実際卒業後、私は食品会社に就職し5年間の営業職を経て、商品開発の部署に異動、結婚し平成

6年2月からは出産休暇と育児休暇をとるようになりました。この間、何度となく仕事がつらくて辞めようと思った時期がありましたが、あの「目からウロコが落ちたような気持ち」がどこか脳裏の片隅にあってここまでこれたような気がします。今後どうなるかはわかりませんが、あのときの気持ちを大切にこれからも育児、家事、仕事と、前向きに挑戦していきたいと思います。

授業中は半分ボーッと(居眠りという言葉が正しい)していた私ですが、卒業論文はもちろん、社会人になるにあたってまた社会人となってからも、先生に励まされ続けてきたのだと改めて感じている次第です。いままでは、大学を尋ねればいつでも鴨澤先生がいらっしゃると思ってきましたが、今後はそうはいかないのだと思うと、とても寂しい気がします。

でも、先生のことですから今後もいろいろとご活躍なさることと信じております。先生、どうぞおからだを大切になさってくださいね。最後に'86年度卒業T組女子を代表して一言。

「WE LOVE KAMOちゃん

フレー フレー カ・モ・ちゃん」

失礼致しました。

My Friend Iwao Kamozaawa: A Brief but Heartfelt Appreciation

John Sargent

(Reader in Geography, Univ. of London)

I first met Iwao Kamozaawa in London in the late 1960s. I am not sure of the exact date but I think our first meeting was most probably in August 1967. I well remember him introducing himself to me (I was then a very junior lecturer) with the words, "My name is Kamozaawa, which means duck pond", followed by that wonderful self-deprecating laugh that is one of his most delightful attributes.

Kamozaawa-san's purpose in visiting England during that year was to consult library

materials and meet specialists on Turkey at the School of Oriental and African Studies, the college of London University where I work (I am not a specialist on Turkey, but a Japanologist). I very clearly remember our first meeting, and I vividly recall the sense of excitement that I felt in encountering a Japanese academic whose interests and points of view were so refreshingly unorthodox. Moreover Kamozaawa-san was kind enough not just to listen to my opinions carefully and critically,

but (and this was most unusual among Japanese academics in those days) he was willing to take the views of a foreigner seriously—probably far more seriously than my opinions deserved!

In the year following this first meeting with Kamoza-wa-san in London, I visited Japan for the second time in my career. It seems to be fairly common experience among Japan specialists that second visits to the field are rarely satisfactory. The exaggeratedly intense enthusiasm and high hopes generated by the first visit are often difficult to recapture, and the subsequent sense of disillusionment can lead one to suspect that one's idolized country has feet of clay. Such was nearly the case with my second visit to Japan; but Kamoza-wa-san and his wife came to the rescue. On many occasions (I am ashamed to recall how frequently I took advantage of their hospitality) I visited them and stayed with them at their home in Urawa.

How I used to look forward to those visits! Not only would I find a welcome that was always warm, happy and relaxed, but I would enjoy conversation of an unusually stimulating kind. Kamoza-wa-san had (and still has) a rare ability to see his own country from the standpoint of a specialist on a developing country (Turkey, in his case). This makes him a dispassionate, fair, but deeply penetrating judge of his own society.

It perhaps follows from this that his work in area studies benefits immeasurably from the comparative perspective that he is able to bring to his research. When he writes about Turkey, he does so from the point of view of one who has thought long and hard about his own society, and about the societies of other countries. This most admirable feature of his work is well demonstrated in the approach

that he takes in his book *Toruko to Nihon no Aida*; it also underlies his investigations into the plight of Turkish *Gastarbeiter* in Germany. This latter work displays another of Kamoza-wa-san's most outstanding characteristics, namely a deep sense of compassion for those who are underprivileged and exploited within capitalist societies.

I greatly admire Kamoza-wa-san's work on Turkey, but more than anything else I value the insights that he has given me into contemporary Japan. My expertise as a Japan specialist has been greatly enriched over the years by my many conversations with him—on topics as varied as Japanese politics, Japanese culture, and Japanese social psychology. Moreover he has often made a point of showing me aspects of Japan that foreigners rarely see—it was he who first took me to San'ya, and he who first introduced me to the delights of Tokyo's Korean restaurants.

Since the late 1960s, most of my visits to Japan have been short ones. But on every occasion without exception, I have always managed to arrange a meeting with Kamoza-wa-san. On far too many of these occasions I am ashamed to say, I have been the beneficiary rather than the provider of the hospitality. Even though our meetings have been relatively few and far between, at each encounter we have been able to take up the threads of our friendship as though there had been no interruption at all. Within a few minutes, we find ourselves again immersed in animated conversation.

I must confess that I am not the most conscientious of geographers, and I have not always followed Japanese debates in the discipline with the attention they deserve. Some time therefore elapsed after our first meeting before I became aware of the extraordinarily high

standing that Kamoza-wa-san enjoys amongst Japanese colleagues: he is highly regarded, not to say venerated, as an incisive theoretician in the field of economic geography. I have always meant to question Kamoza-wa-san on geographical theory, but I have never had the courage to do so, not just because of my own lamentable ignorance, but because among many Japanese geographers, he is held to be a strict and even fearsome debater. I must admit that this reputation does not conform with my own experience—in all of my dealings with him, I have always found him to be gentle, tolerant, and extremely humorous.

Perhaps on my next visit, there will be a chance for us to debate trends in the discipline. More likely, though, we will find ourselves turning, as always, to more general and, dare I say it, more interesting topics: the chances of success of the new coalition government (I

would *very* much like to hear his views on that one!), or whether or not traditional Japanese social values remain intact, or the predicament of foreign workers in Europe and Japan, or current trends in Russia and Eastern Europe, or social and political contrasts between Greece and Turkey, or any one of a number of similar matters of keen mutual interest.

I find it quite impossible to believe that Kamoza-wa-san will be seventy years old in the spring of 1994. To me, he has not aged in all of the 26 years that I have known him. I rejoice in his originality and in his lively and enquiring mind. I admire his ability to deflate pomposity and expose insincerity. I respect his learning and scholarship. I thank him for his hospitality and his humour. I know that he and Hisayo will always remain young and adventurous in spirit, and I wish them both a long, healthy, and very happy retirement.

On My Friendship With A Real Japanese Gentleman

RUSEN KELEŞ

(Prof. of Ankara Univ, Fac. of Political Science)

I should begin with underlining that it is a real pleasure for me to have the opportunity to say a few words about my acquaintance with Professor Kamoza-wa in this connection. I have known him since the early 1960's where he was visiting my country frequently as a scholar and carrying out scientific research on socio-economic and geographical issues of Turkey. In the years ahead, I had a chance to see him several times, on various occasions, in Tokyo and in Ankara.

Professor Kamoza-wa as a well familiar person with changes in the socio-economic structure of Japanese cities, towns and villages, had taken me to show the most tradi-

tional rail lines (Toden) in some districts of Tokyo. We had visited also together some outmoded small industrial establishments, pencil factories for example, in some parts of Tokyo, working with conventional kind of energy sources, like manual power. As I became more familiar with Japan, I have come to understand how these awkward structures were living together, side by side, with modern economic organizations, and how important contributions they were making to the growth of the economy.

I have always read with great interest and appreciation his writings on Turkey which were essentially a proof of his incisive master-

ing of the characteristics of Turkey's social structure. Each of his publications indicates that he is in fact one of the few experts in the world who is most familiar with modern Turkey. His articles on the evaluation of the socio-economic development tendencies in Turkey, Turkish immigrant workers in Germany, ethnic minorities in Western Thrace (*) are a few of the examples of his sound observations and analyses.

Professor Kamozaawa's interest in rural structure in Japan and Turkey helped me in another context to cooperate with him closely. His article on rural settlement in Sawauchi Mura (**) influenced me greatly in the 1970's, and increased my curiosity to know more about that village.

It has been an unforgettable memory, as well as a highly didactic trip for me, to travel from Tokyo to Morioka together with Professor Kamozaawa during April 1988. We took

Shinkansen to Sendai, local train from Sendai to Morioka and then a local bus to Sawauchi Mura. He helped me to see closely living conditions in a prosperous village, its achievements during the last 25 years, to know some of the key local peoples who had contributed a lot to these accomplishments. Mayor Soden Ota, Dr. Masuda and Mr. Terui were among these distinguished personalities.

We have also had in Sawauchi, the company of Dr. Nobuo Maeda who had written in the past about the success of child health programmes in the village.

My observations on the impressive achievements realized by the villagers of Sawauchi during the postwar period convinced me later on, on the usefulness of translating the book of Manzen Araki, on Sawauchi, *To Save the Lives of The Villagers*, into Turkish for the benefit of local leaders and community developers. Much appreciation belongs to Professor Kamozaawa for having introduced me to the people of Sawauchi Mura.

While he was a visiting scholar at the Faculty of Political Science, Ankara University in the Spring of 1991, we have travelled into the south-eastern provinces of Turkey, in order to visit the Atatürk Dam near Urfa and to see some of the rural development projects being implemented in the GAP region. The governor and mayor of Diyarbakir helped us to visit some nearby Kurdish villages together.

Professor Kamozaawa won the admiration and respect of all people of various ages, professions, classes and origins that he had the chance to meet in my country. His fluent Turkish also contributed to his acceptance by them as someone from among themselves.

He is a very modest person and a real scholar. It seems to me that his modesty is more sensible than that of an average Japanese. His

(*) —“Ethnic Minority in Regionalization: The Case of Turks in Western Thrace”, Population Mobility in the Mediterranean World, Mediterranean Studies Research Group at Hitotsubashi University, Tokyo 1982, 125-137.

—“Turkish Immigrant Coal Miners In the Ruhr District, West Germany”, Studies in Socio-Cultural Aspects of the Mediterranean Islands, Research Group for the Mediterranean at Hitotsubashi University, Tokyo 1979, 109-143.

—“How to Evaluate the Socio-Economic Development Tendencies of the Republic of Turkey?”, Studies in the Mediterranean World, Past and Present XI. Mediterranean Studies Research Groups at Hitotsubashi University, Tokyo 1988.

(**) “Rural Settlement in Sawauchi Mura”, Ann. of the Assoc. of Econ. Geogr., Vol. 19, No. 2, 1973.

world view seemed to me always progressive and for novelty. Not the conservatism, but interest in change for a better and more civilized world in peace seemed always to dominate his thinking. Thus, he has been one of the outstanding pioneers to open academia into outside world.

Besides, he has been a real friend of Turks

and Turkey, without losing his objectivity in his scientific works and publications.

I take this opportunity to wish him and the family good health and much success in the future. I also thank those who have given me the chance to convey my best regards to him in this connection.

法政私淑思慕

菊 池 豊

(1961 年度院修修了)

鴨澤先生のお名前を初めてお知り申し上げたのは、実は 2 冊の書物からである。その 1 冊の書目は、「世界と日本——明日のための人文地理——上・下 (飯塚浩二編著, 1955 年, 1957 年大修館発行)」の地理書である。私はこの書冊の序文に驚嘆し、尚且つ論述の内容を読み玩味するに及び、強烈な衝撃と其れ迄に無かった感銘を受けたことを覚えている。特に具体的な地域や世界地理と世界史の関係におけるクロスファイヤ諸論の展開は蒙昧としていた世界に対する認識を改められ、既成の概念を転換させるものになった。暗闇に光明を得たというか、目から鱗が落ちる境地とはこの事かと痛感した。

この書冊が高校用教科書 (少くとも副読本として) 目録に掲載されていたならと、未だに残念に思っている。教科書として除外された事は後日大修館の知人から聞いたが、然しこの書冊は出版後ベストセラーとなり毎日出版文化賞を受賞した。蓋し書冊の内容から当然の事象と思った。以後私にとって地理書のバイブルになり、現在も色あせた上下の初版本が座右に有る。

次に第二の書目は「現代の地理学——人文地理・経済地理——」(入江敏夫編著, 1965 年廣文社発行) の地理書である。本書の第 1 章人文地理学の歴史及び第 2 章世界の諸地域の地域区分論、特に地域区分の基本的な原理は難解だが、私にとってはもう一つのバイブルになっている。

近年では 1985 年 4 月の法政大学地理学会大会における鴨澤先生の「地誌の命運」の講演は私には初めての講義であり、講演中のご提示なされた「地誌の命運」は極めて重要な地誌的方法論の主題として脳裏に刻まれています。特に講演要旨の〔V〕,〔VI〕で論ぜられた人間集団の必然性として、地誌記載の方法の検討。また、〔付〕で地理学諸局面を統一する規準として 4 例を上げられ、異なった空間の対立関係について明確な概念を示唆されました。地球の環境問題が大きくクローズアップされている今日、全地球の生態系の空間と消費を如何に判断し考え行動すべきか? 貴重なご教示を拝聴することが出来ました。この講演を拝聴し、「疑わしきを闕き、殆きを闕く」という鴨澤先生の碩学の鑑奥に聊かでも触れる機会を得られたことは、私には生涯の幸運であったと感銘しております。

浦和思慕。1960 年頃私は論文作成中、論旨の不徹底等の欠陥に落ち込み途惑い苦悶の末、厚顔無恥にも分際を弁えず本学会の現副会長をしている畏友岡永亮八郎氏に同行してもらい北浦和の鴨澤先生のご自宅にお伺いし、論文や就職・人生問題等彼是とで指導をお願い致しました。先生には休日にも不拘ず私共の無理な申し入れを快諾して下さい、日溜まりの縁側で一知半解な論文構成や本論記述について、厳しく且つ洋洋易易の「心を落ち着けて集中せよ。」とご教示を賜りました。

また、就職についても貴重なご助言を頂きました。幸い、既に防衛庁に内定し、一方都立高校の検定試験に合格し、ほぼ内定が進行していたので進路の選択にも迷っていません。若しあの時点で先生にお目に掛かる事が出来なかったら、論文の成案も都立高校教師への道も有り得無かったと思います。その事を回顧すると今でも心に震撼を覚え、只管感謝する許りであります。

報恩心肝。毎年元旦に拝受する賀状は、国内外の情況観照や野山・街角の草花の写真が印象的で何時も魅了されております。今後更に思い^な做し大

事に収めておきたいと考えております。

私も昨年定年退職し、現在は非常勤特別職という身分で都立北園高校に勤務しています。通勤の途中車窓から街が変貌して良く判りませんが、時折、北浦和の先生のご自宅辺りを懐しく思い出しています。其の都度鴨澤先生の「知・仁の究め」の一片でも己の浅学の糧にさせていただくことが出来るならばと肅として考えさせられます。これからご自愛専一になされて益益のご発展とご清福を願い、報恩の念を心から申し上げます。

秘密の宝箱

栗原 尚子

(お茶の水女子大学助教授, 1979年度院博修了)

鴨澤先生との出会いは、ミニスカート全盛の、大学が大揺れに揺れていた「あの時代」である。わたしは地理学科を卒業したものの、経済地理学会なんたるものかも知らず、もう一度初めからすべてをやり直すつもりで、まず手にしたのが『経済地理学ノート』であった。もう絶版になさっていた時で、竹内文庫から借用したものであった。

その後、メキシコ留学から帰り、このままでは行く末八方ふさがりになることが見えたとき、手を差し延べてくれたのが法政大学の大学院で、指導教員をお引き受けいただいたのが鴨澤先生であった。無理やりお願いしたのに近いのが真相であるが。この機会が得られなかったら今日のわたしはありえなかったと思う。途上国研究におけるトルコの事例からメキシコを捉えなおす視点、地理学における人間とくにマイノリティグループに対する研究視座を確立することが6年間のゼミに通底していたわたしにとっての基本的テーマであったと思う。飲むのと吸うの^とを御覧になって、とても女性とは思えないと言われつつ、楽しい放課後の一時も、市ヶ谷の土手を駆け抜けるエネルギーになった。

現地調査のフィールドで最も印象に残っているのは、冬の沢内村である。沢内で生活する素晴ら

しい人々に出会え、その方々の話は今でも鮮明に脳裏に浮かぶ。心尽くしてセッティングしてくださった現地調査であるにもかかわらず、わたしは3日目に12時迄に勤務地に戻らなければならず(今だったらパスしますが)、そのスケジュールを決行したのである。朝早くバスもないことから、免許取立の片岡義晴さんが車で水沢駅まで送ってくださることになったが、何しろ雪の山道、心配なされた先生は同乗して下さったのである。雪道は難所であり加えて途中では吹雪くのは連続に遭遇しながら、それでもお二人とも何も仰らずに送って下さったのである。今でも雪というこの危険な道中を思い出し、お詫びするだけでなく自分の迷惑さ加減に自己嫌悪に陥っている。

この不遜の弟子が常日頃「先生」を棚上げした如くの接し方を許していただいているのは、全く先生の人柄に因っている。その人柄の接点が多様なことが豊かな人間関係を創り出す契機になっているのであろう。改めて記すまでもなく、反権力と徹底した反権威主義(反権力であっても権威主義者は多々いる)、ユーモアのセンス、そしてなによりも「人としての優しさ」が接する人誰でも魅了するのだと思う。

鴨澤先生が御退職とは信じられず、最近とみに

スピードアップしてきた時間の経過を痛感しつつ、振り返ってみると、わたしにとっての節目、節目に先生がいらっしゃったことに気づき、何にも替えがたいことであった。何度心のこもった励ましをいただいたことか、どうしろこうしろとは

決して仰らずただじっと見守って下さることが、わたしにとっての何よりの救いであった。

鴨澤先生を物語るエピソードは数々ありますが、大事な宝箱に大切に保管しておきます。それは秘密です。わたしの老後の楽しみです。

事実から学ぶ姿勢

照井 富太

(岩手県沢内村)

私は村で唯一の旅館「ろくのへ」の主人です。食料品なら日常生活で不自由ない、総合食品店「六戸商店」の経営者でもあります。村の役場や病院、教育委員会、社会福祉協議会、JA西和賀など、公共施設まで10分もあれば十分通える位置にある店舗です。

鴨澤先生が沢内村に入ってこられるようになって、20年目でしょうか。沢内村全域を、法政大学の通信教育の学生さんたちの現地研究の場とされた先生は、変わることなく、ろくのへ旅館を利用していただきました。山村の旅館が研修生で満員になるなんて、そんな日は年に何度もないのです。先生とのふれあいで、感謝しているのは、私だけでなく、家族全員です。

先生はときどき、外国の大学教授や研究者をお連れになることもありました。1988年には、トルコのアンカラ大学、R. ケレシュ先生と一緒にしました。日本経済新聞社記者の荒木万全氏の『村人の生命を救うために』という出版物の英語版（沢内村の保健行政を中心とした村づくり）をお読みになり、ケレシュ先生は深い感銘を受けられ、トルコ語に訳されたこと、鴨澤先生のお手紙で知りました。そして、本を送ってくださった仲介者も鴨澤先生でした。

沢内村の活動は、菊地武雄著『自分たちで生命を守った村』岩波新書、照井覚治『むらづくり一筋』清文社（この中に、先生の「原理をふまえたむらづくり—照井覚治さんがめざすもの—」という文章があります）、太田祖電他著『沢内村奮戦記』あけび書房、指田志恵子著『生命満つる里沢

内村』などで知られていますが、何度繰り返し読んでも、心が洗われる思いです。

昭和32年と36年、深沢晟雄村長の選挙運動員だった私は、36年7月から村立病院、37年7月から行政機構改革で新設された日本で初めての村健康管理課で、増田 進先生を課長にむかえ、私は課長補佐、のちに主幹として59年3月まで働きました。

鴨澤先生は、学生の研修のために沢内村に入ると、太田村長、増田先生、照井覚治氏、西和賀農協長の佐々木寛氏の講話をセットしたようでした。ときどき、誘致企業や農家の人の生の声を聴かれたように思っています。先生は常に、「事実から学ぶ」という姿勢のように、私の目には映りました。

たまに私にも出番がまわってくることもあり、軽率な私の話を30～40分もメモをとっておられたこともありました。いま、こうしてじっくり考えていると赤面の至りです。

私は59年退職後、一時、寝たきりの状態になりました。村立病院に入院、増田院長を主治医として1ヵ月療養しました。快復のきざしがみえぬ私を心配してくださった増田先生は、病院の救急車で看護婦とともに付き添って東京まで移送してくださいました。幸い、MRIが開発されて間もない61年の3月、東大病院で手術に成功、社会生活が可能となりました。

平成元年1月、村内の青壮年有志が「21世紀の沢内村を創る会」を発足させ、私がおの会長に選ばれました。若者がいない、農業商業にも後継者

がない、保育所も学校もこのままでは無くなってしまう。村内企業で働く人も不足、村外への通勤者は100名を超している。それらを組織しよう。対策と課題は山ほどある。

そんな折り、村立病院が赤字になりました。行政側の経営検討会では、病院を診療所になどなど、たいへんな議論が平然となされるようになってきました。「住民の生命を守るのが行政の基本」と言った深沢元村長の政治哲学が風化してきたのです。

いま、村は60歳以上の高齢者率は全人口の21パーセントを超えています。岩手県下でも高いランクです。すぐれた保健医療体制に福祉を統合した21世紀型のプランをいまつくらねばなりません。「21世紀の会」が音頭をとり、青年会婦人会老人クラブを結集し、沢内村の保健と医療と福祉を

考える村民大会を開きました。NHKの「プライム10」が全国放送しました。村長は、福祉施設を病院と併設したいと住民に約束したが、それが実現しませんでした。その折りも、NHKの放送を見られた感想を含めて、鴨澤先生から、村政の基本にかかわる具体的な事例をあげてご教示いただき、勇気づけられました。平成5年7月末、村の教育委員会と社協共催のコーリム大学で、鴨澤先生の記念講演があり、住民主体の行政の取り組み事例でした。深い感銘を受け、拝聴しました。

ヤンチャな人生をおくってきた私でしたが、鴨澤先生や増田先生と身近にふれあう機会をいただき、多くを学ぶことができました。私自身、人生観が少しは変わってきたように思っています。私の人生の中で、この20年は生き甲斐のあるものでした。